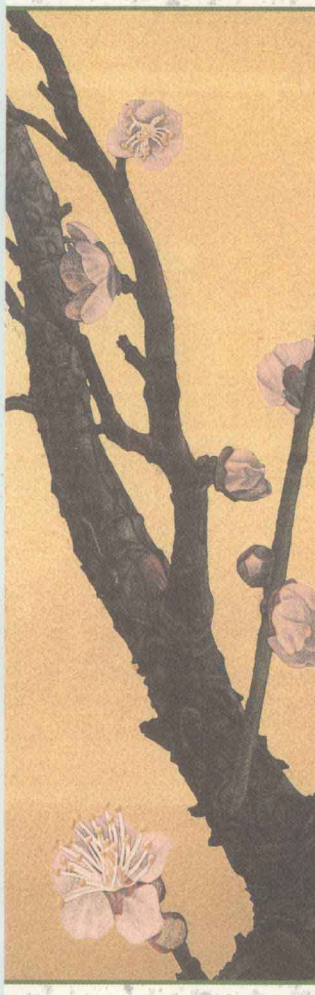
五年の梅

乙川優三郎



新潮社

五年の梅

乙川優三郎

五年の梅

発行――二〇〇〇年八月二〇日
七刷――二〇〇二年七月三〇日
著者――乙川優三郎
発行者――佐藤隆信
発行所――株式会社新潮社
162-8711 東京都新宿区矢来町七一
電話――編集部(03)三二六六―五四一一
読者係(03)三二六六―五一一一
印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――加藤製本株式会社
© Yuzaburo Otokawa 2000, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。
ISBN4-10-439301-0 C0093

目次

後瀬(のちせ)の花　5
行(ゆ)き道　41
小田原鰹　75
蟹(かに)　145
五年の梅　183

装画◎宮山広明
装幀◎新潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

五年の梅

後瀬の花

一

「ねえ、おまえさん、いま通った人、升屋のご隠居さんじゃないかえ」
となりでおふじが言った。
「ああ、そうかも知れねえ」
「この雨に傘も差さないでさ、いったいどこへ行くんだろうね」
「さあな、そんなこたあ、どうでもいいじゃねえか」
矢之吉はちらりと街道を見たが、遠ざかる黒い人影を見ただけで、すぐに足下に眼を戻した。
汚れた煙草入れはあるのに、どこをどう探しても煙草筒が見当たらず苛々が募っていた。
「それより……」

矢之吉は言いさして溜息をついた。おふじも自分も、たったいま遣り過ごした米屋だか雑穀屋だかの隠居のように、ついさっきまで小雨の中をてくてくと歩いてきたところだった。それほど疲れたわけでも腹が空いたわけでもないのに、急に歩くのが億劫になり、おふじにそう言って道端にあった祠で雨宿りをしている。どういう謂があって何の神様を祀ってあるのか、祠の中は薄暗く荒れていて分からなかったが、傍にいるおふじの顔だけはよく見えていた。

おふじは子供のように頬がふっくらとして小さな口を持っている。はじめて見たときの印象はさほどでもないのに、幾度か会ううちにひどく綺麗に見えてくる不思議な顔立ちをしてい、そのために金を使って通いたくなるような、男相手の商売にはぴったりの女だった。顔がそういう具合なので、少しばかり血の巡りが悪いところがあっても、男にはそれが却って純真に思われ、自分を人並以上の物知りに感じさせてくれたり、家や奉公先で厭なことがあったあとにはほっとさせてもくれる。だが、それもこれも薄暗い酒の席でのことだった。

（女ってのは……）

人のことばかり気にして、てめえのことはぱっと忘れちまう。目先のことばかり考えて本当の先は考えねえ。そのくせ旗色が悪くなると何でも男のせいにしやがる。

矢之吉は思いながら、となりでぼんやりとしている女へ、

「だいたい、おれたちゃあ、これからどこへ行くんだ」

と言った。

「人さまの心配でもねえだろう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「そりゃ、そうだけど……」
おふじは言ったきり、所在なげに髪から櫛を抜いて掃除をはじめた。安物の赤い櫛は矢之吉が一年ほど前に買ってやったもので、じきに塗りが剝げてしまい、髪を梳くと赤い破片がつくので、おふじはそうしてしょっちゅう剝がれそうなところを指の爪で引っ掻いている。もっといい櫛が欲しいわ。ひとことそう言えばいいものを、矢之吉には当て付けがましく見えるだけだった。
「当てもなく歩いたってしょうがねえだろう」
矢之吉は顔をしかめておふじの指先を睨むと、吐き捨てるように言った。
「これからどうするか、よく考えねえとな」
「どうするって、男なんだから、おまえさんが決めてよ、あたしはどこへだってついていくわ」
「またそれか……」
矢之吉は胸の底から、おふじにも聞こえるような吐息をついた。
「人に下駄を預けるのは楽でいいやな」
「じゃあ、言うけど、この道、ずっと一本道よ、行くか戻るかしかないんじゃないの」
「そういうことじゃねえんだ、おれが言ってるのは……つまり、もっとさきのことよ、これからどこで何をして暮らすかってことだ」
すると、おふじはにっこりと笑った。笑うと目尻に皺が寄るが、透き通るような肌をしているので却って色っぽく見えるのもほかの女と違っていた。
「だったら決まってるわ」

とおふじは嬉しそうに言った。
「あたし、小料理屋をはじめるのがいいと思うの」
「おめえ、まだ懲りねえのか」
矢之吉は呆れ顔で、ようやく自分のものになった女を見たが、おふじの眼はいい夢でも見ているように無邪気だった。
「来る日も来る日も酒の相手して、たいした金にもならねえ、そう言ってこぼしてたじゃねえか」
「それは女中のときよ、女将さんならお客のほうが一目置いてくれるわ、それくらいのお金あるんでしょ」
「ああ、金ならあるがな……」
「おまえさんだって楽ができるじゃない、店に出なくたっていいんだし、寝ててもお金は貯まるわ」
「そううまくはいかねえ、おめえのいた店だって客筋はよかったが、ざっと踏んでも一日の上がりはよくて一両二分ってところだろう、内証は苦しかったんじゃねえのか」
太物屋の手代だった矢之吉は、そういう勘定は御手の物で、二日も通えばその店の売り上げは見当がついたが、おふじは自分が勤めていた店の身代さえよく知らなかった。
「そうかしら」
おふじは首をかしげて言った。
「女将さんはいい着物をたくさん持ってたし、昼間はお客さんと芝居見物に行ったり、髪結いだ

って三日に一度は行ってたわ」
「着物と髪結いは商売道具みてえなもんだろう、芝居は客の金で観てたんだろうし、亭主と出かけることはなかったんじゃねえのか」
「……」
「商いはな、店を出したからって、おめえが考えるほど楽でもなけりゃ、そううまくいくものでもねえ」
「だったら、ほかにいい考えがあるの」
「ねえから訊いているんじゃねえか」
矢之吉は言ったが、おふじがまったく当てにならないことを改めて確かめたようなものだった。
「きっと何とかなるわよ、お金はたくさんあるんだし……」
おふじは呑気なことを言って、また櫛の掃除をはじめた。しかも子供が遊ぶように、ときおり櫛の歯に爪を立てては櫚に障る音を立てた。そうすると歯の間につまった粉のような破片がぽろぽろと落ちたが、櫛はもう表面が斑にはげていて、そこまでする値打ちがあるのかどうかも疑わしかった。だがそんな櫛を、おふじは大切にもしないかわり、文句も言わずに使っている。
見ていると、じきにおふじはそれがいま最も大切なことのように夢中になって、せっせと爪弾いては櫛の歯を鳴らした。
矢之吉は寒気がした。こんなはずじゃなかったと思いながら、三間ほど離れている街道を見ると、また男がひとり、とぼとぼと二人の前を通り過ぎてゆくところだった。

「しっかりしねえと、こんな金はすぐに消えちまうさ」
「……」
「もう、しくじるわけにはいかねえんだ」
矢之吉は繰り返したが、おふじはまるで聞いていないようだった。寒くもないのに震えている膝頭を摑むと、矢之吉はじっと暗い空を仰いだ。
「ちくしょう、ひでえ降りになってきたぜ」

二

はじめて「小松」という坂下町の小料理屋へ行ったとき、矢之吉は店の番頭の和助と一緒だった。その日は朝から二人で得意先を回り、入荷したばかりの麻織物を売り歩いていると、案外なほどうまく売れて午後には売るものがなくなり、見本の品を見せて注文をとるほどだった。滅多にないことで、店へ帰ると果たして主人が和助へ褒美の小遣いをくれたのである。
通い番頭の和助は坂下町に住んでいて、店が終わると矢之吉を酒に誘ってくれた。二人とも歩き回って疲れていたが、気分はよかったし、何よりも惜しげなく使える金があったので、いつもよりいい店へ行こうと和助が言った。和助もそれまでは暖簾を眺めるだけで、中へ入ったことはなかったらしい。
白抜きに小さく小松と染めた涼しげな水色の暖簾をくぐると、果たして店の中は小綺麗に整っ

ていて、矢之吉には少し暗い感じがしたが、料理の彩りやそれを運んでくる女たちは却って鮮やかに見えた。

「よろしかったら、お酌しましょうか」

おふじは愛想よく言って、入れ込みの座敷に向かい合っていた二人の横に座った。途端にぷうんと化粧の香がして、矢之吉は胸がどきどきした。子供のころにとなりに住んでいたおせんちゃんみてえだと思った。突然、二十年近くも会っていない幼馴染みを思い出したのは、おふじの頬がその子のようにふっくらとしていたからだが、しかしその体から匂ってくるものはもちろん違っていた。

おふじはすすめ上手で、銚子が空くと注文に立ち、ついでに衝立で仕切った客の間を行ったり来たりしてはまた戻ってきた。客は馴染みが多いらしく、店の中はうるさくも静かすぎもせず居心地がよかった。おしまという中年増の女将が小粋で、客の視線も魂胆もくびれた腰のあたりで右へ左へ流しているかに見えたが、少しもぞんざいな感じはしなかった。

「酒も料理もうまいし、感じのいい店ですね」

矢之吉が言うと、和助はうなずいたものの、

「しかし、そうしょっちゅうは来られないね」

と言った。

「あれをごらん」

和助が眼で指したのは、板場と店を仕切っている細長い小窓で、同じ小鉢がいくつも並んでい

た。矢之吉が確かめて振り向くと、和助は顔を近付けて囁いた。
「数からいって誰も頼んじゃいないものだが、箸休めにおひとつどうぞとか何とか言って運んでくるに違いない、客は頼んでいないからただかと思うが、もちろんそこはちゃんと勘定にのせてね」
その通りだった。だが矢之吉はそうと分かっても悪い気分はしなかったのである。自分の懐が痛む酒ではなかったせいもあるが、箸休めのひとつくらい勘定にのせられても、それを帳消しにして余りあるいい気分を味わっていたからだろう。
おふじは年配の和助に気を遣いながらも、矢之吉の無遠慮な視線を笑顔で受けとめて放さなかった。
「ご商売、当ててみましょうか」
「へえ、分かるかな」
「あてずっぽうだけど、それはよく当たるんですよ」
とおふじはいたずらな、しかし凄艶な目付きで矢之吉を見つめ返してきた。
「じゃあ、当ててごらん」
「そうね、大店の番頭さんと手代さん」
「……」
「あら、違ったかしら」
「いや、驚いた、大店というのは違うが、あとはぴったりだよ、どうして分かるんだい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.